



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本におけるロングトレイルの潮流
Author(s)	木村, 宏
Citation	CATS 叢書, 11, 83-89
Issue Date	2017-03-07
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/66700
Type	departmental bulletin paper
File Information	CATS11_12.pdf



日本におけるロングトレイルの潮流

木村 宏

北海道大学観光学高等研究センター 特任教授

「ロングトレイル」—— それは、「歩く旅」を楽しむために造られた道のことである¹⁾。一昔前までは、ロングトレイルという言葉さえ知る者は少なかったが、今、ロングトレイルは密かな盛り上がり、確かな可能性を見せ始めている。本稿に於いては、そのロングトレイルの変遷と課題、そして今後の可能性に関してご紹介したい。

1. ロングトレイルがもたらす地域活性化の可能性

(1) 日本におけるロングトレイルの萌芽

2009 年、国土交通大臣を本部長とする「観光立国推進連絡会議」が立ち上がった。その推進体制構築の中で、スポーツ団体、観光団体、スポーツ関連企業、旅行関係企業、メディア及び文部科学省など関係省庁が一堂に会する「スポーツツーリズム推進連絡会議」が発足、その議論の末、「スポーツツーリズム推進基本方針」が打ち出された。アウトドアアクティビティを普及活性化する試みの萌芽期における「日本ロングトレイル協議会」の発足についての記載で、「ロングトレイル」という言葉は、この時初めて日本のスポーツツーリズムの世界に立ち現れた。

ロングトレイルは、上記方針により 2010 年に発足した日本ロングトレイル協議会（現 NPO 法人日本ロングトレイル協会）によれば、以下のように定義づけられている。

ロングトレイルとは「歩く旅」を楽しむために造られた道のことです。登頂（ピークハント）を、目的とする登山とは異なり、登山道やハイキング道、自然散策路、里山のあぜ道、ときには車道などを歩きながら、その地域の自然や歴史、文化に触れることができるのがロングトレイルです²⁾。

また、以下のように説明しているものもある。

ロングトレイルとは、山や森林など自然の中を通る長距離自然歩道のこと。「トレイル」は英語で原野や荒地の小道を意味する。通常、舗装された自動車道などは含まれない。一般的には 50km 以上をロングトレイルと呼ぶが、50km 以下のものから 4,000km を超すものまで様々なロングトレイルがある³⁾。

いずれにせよ、その距離は明確には明記されておらず、実情としても、その長短の概念は、トレイル管理者の判断に委ねられているのが現状である。

後述のとおり、各国、各地のロングトレイルは、その成り立ちや利用者の想い、利用者層が様々である。しかし、日本に於いては、現在敷設される「ロングトレイル」は押し並べて、地域の活性化をその理念や目的に掲げていると言える。また、その貴重な自然資源や生態系の維持という国土保全も目的とし、健全な地域資源の利活用も謳われている。更に、地方創生の名のもとに観光地域づくりの手段やアクティビティの一つとして、そして、広域観光の推進基盤としても捉えられているのである。

(2) 海外映画に見るロングトレイル

2016年7月、映画「ロングトレイル」(2015 米国, 監督:ケン・クワピス) が日本で公開された。原作は「A WALK IN THE WOOD」(1998, 著者:ビル・ブライソン)。名優ロバート・レッドフォードが演じる主人公ビルが、社会の第一線を退き、平穏な生活を送る毎日に飽き足らず、ふと思いつきでアメリカ合衆国を代表する全長 3,500km のロングトレイルであるアパラチアン・トレイルの踏破にニック・ノルティー演じる旧友カッツとともにチャレンジする映画である。ロングトレイルを歩く中、二人は、大自然に立ち向かうがゆえのアクシデントに遭遇し、歩く時間を通じ語り合い、人生を振り返る。歩くことで普段の生活では得られない貴重な体験を重ねる二人をコミカルに描いた作品である。

ちなみに、米国には三大トレイルと呼ばれるものがある。ビルとカッツが挑戦したジョージア州からメイン州までの 13 州を貫く全長 3,500m のアパラチアン・トレイル、西海岸のメキシコからカナダまでを結ぶ全長 4,200km のパシフィック・クレスト・トレイル、そして、中央アメリカをロッキー山脈に沿ってやはりメキシコからカナダまでを貫くコンチネンタル・デバイドトレイル(未完成)がその 3 つであるが、この未完成のコンチネンタル・デバイドトレイルは、完成すると約 5,000km の道のりとなると言われている。

また、西欧においては、フランスからピレネー山脈を越えてスペイン北部を歩くサンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼路が有名である。この巡礼道を舞台にした映画がスペインで初公開された「星の旅人たち」(2010 米国, 監督:エミリオ・エステンベス) である。この物語では、息子を失った父親が、息子が成し遂げられなかったサンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼路の旅をなぞり、息子への思いを胸に歩き通す。旅を通じて人との出会いや様々な経験をし、息子に対する思いを新たにするというヒューマンドラマである。

どちらの映画も、「歩く旅」を通して生きることへの思い、自然の中に生かされている小さな存在の我を自覚し、家族や友人との心のつながりを感じ、人生を振り返る心の内面が色濃く描かれている。

(3) 信仰の旅から観光資源へ

日本に於いては、2000 年代に入りようやく日の目を見始めた日の目を浴び始めたロング

トレイルであるが、欧米に於いては、前項に挙げたようにトレイル文化というものは既に市民権を得ている。

しかしながら、日本に於いてロングトレイル文化が全くなかったのかと言われれば、そういうわけでもない。かつての熊野詣や伊勢参りもある種のロングトレイルと言って差し支えないであろう。このような聖地巡礼は、近年では信仰の旅としての要素を残しつつも、旅行行動として、そして、健康増進のための歩行路として、様々な思いを持って歩く人々が増えてきている。長い道のりを歩く旅、ロングトレイルの観光資産としての新たな価値創造が日本に於いても始まっていると言えよう。観光資産であることは地域に新たな需要を生み、ひいては新たな生産活動や消費活動を誘発するものとなりうる。こうして、ロングトレイルの開設は、現在、地域活性化の手法として取り沙汰されてきているのである。

2. 日本におけるロングトレイルの状況

(1) 「山歩き」からロングトレイルへ

「日本百名山」(1964 年出版、著者：深田久弥)が発刊され、国内においては百名山ブームが巻き起こった。1990 年代に入ってから、マスメディアが百名山の魅力を映像にして伝えたことをきっかけに日本各地の百名山を目指すハイカーが急増、普段登山に馴染みの薄かった人々がピークを目指した。そして、2010 年前後になり、それまで中高年層が主体であったハイカーに若返りが生じる。このハイカー層の変化は、登山中心層の高齢化、若者の自然回帰志向の高まり、「山ガール」のブームとともに、山登りをファッション感覚で捉える時代への変化としても捉えられる。それは、巷のアウトドアショップに並ぶ登山・トレッキングウェアにおけるテキスタイルデザインのターゲットが若者や女性に向けられ、それに関連するギアもスタイリッシュなものへと変化し、ファッション感覚のアウトドア用品の演出がなされていることから窺える。

また、これまでは、頂上を目指す「山登り」が主流であったが、ピークハントほどのハードな動作や達成感を求めず、思いのままに、周辺の自然や人との触れ合い、地域の文化・歴史に触れながら歩くことを楽しむことに重きを置き、ピークハントとは違う達成感をその歩行距離に置き換えた「ロングトレイル」が新たなカテゴリーとして認知され始めるようになっていった。

(2) 長距離自然歩道

古くは修験、巡礼の道が長い道のりを歩く旅の起源とすれば、近年におけるロングトレイルは、1975 年から供用開始された、当時総理府の外局であった環境庁(現環境省)が整備した長距離自然歩道をその始まりと捉えることができる。環境庁が主導していることから分かるとおり、歩道の整備は、当時は地域活性化というよりむしろ自然とのふれあい、自然保護の精神を歩くことを通して楽しみながら理解してほしいという理念をもとにしたものであった。

環境庁は、長距離自然歩道に関して、以下のように述べている。

長距離自然歩道は、国土を縦断、横断又は循環し、多くの人々が四季を通じて手軽に楽しくかつ安全に国土の優れた風景地等を歩くことにより、沿線の豊かな自然環境や自然景観、さらには歴史や文化に触れ、国土や風土を再認識し、併せて自然保護に対する意識を高めることを目的としている⁴⁾

長距離自然歩道は、第1期に東海自然歩道、これに続いて九州、中国、四国、首都圏、東北、中部東北、近畿地方において整備がなされ、現在北海道でも整備が続いている。また、九州自然歩道は、九州各県をめぐる全長2,116kmの歩道で、起点が福岡県の皿倉山（標高622m）におかれ、ここには前述のアパラチアン・トレイルの提唱者の一人であったベイトン・マッケイ（アメリカ）の以下の言葉が、元標に刻まれている。

自然歩道の効用は、体力を作ること、もう一つは自然に親しむことである。将来自然歩道で体力増強のための競技が行われることがあれば、大変不幸なことだが、そのときはちゅうちょなく自分は、一番遅かった人に賞を与える

まさに歩く楽しみ、自然とのふれあいを提唱した言葉である。

これに対して、みちのく潮風トレイルは、地域復興や震災遺構の継承・伝承といった新たな思いが盛り込まれている。2011年3月に発生した東日本大震災からの復興に資するための「三陸復興国立公園の創設を核としたグリーン復興のビジョン」（2012年環境省策定）のプロジェクトの一つとして、青森県から福島県の被災地約700kmをつなぐ復興の道「みちのく潮風トレイル」は、2020年の全線開通を目指して、現在、整備が進んでいる。

（3）ロングトレイル時代の幕開け

2000年7月、日本初の「ロングトレイル」の構想を打ち出し、具現化した「信越トレイル」が長野・新潟県境の関田山脈の尾根筋を利用して開設された。長距離自然歩道に次ぐロングトレイル時代の幕開けと言えるであろう。開設のきっかけは、国の地域づくりの手法の一つでもあった広域連携に関する調査事業であった。国土交通省「北陸地域の地域づくり戦略」によるロングトレイルの可能性と効果を調査、検討する委員会が発展的解散した後、トレイルの整備や維持管理をマネジメントするNPO法人信越トレイルクラブ（飯山市）が立ち上がり、多く地域住民やボランティアの力を借り、8年の歳月をかけ80kmに及ぶトレッキングルートが完成した。

これをきっかけに各地でロングトレイルを整備する動きが加速する。その一部を成り立ちの形態とともに紹介すると、既存の登山道やトレッキングルートをつなぎ合わせ、新たにロングトレイルとしてのコースを設定する手法を用いた全長80kmの高島トレイル（管理団体：NPO法人高島トレイルクラブ〈高島市〉）、全長200mの八ヶ岳山麓スーパートレイル（NPO法人八ヶ岳スーパートレイル

クラブ〈茅野市〉), 全長2コース合計130kmの京都一周トレイル(京都一周トレイル会〈京都市〉), 古道や旧道を復活利用した, 全8コース合計117kmの奥津軽トレイル(金木元気倶楽部〈金木町〉), 全長120kmの塩の道トレイル(小谷村商工会〈小谷村〉), ジオパークをめぐる山陰海岸ジオパークトレイル(一般社団法人鳥取市コンベンション協会〈鳥取市〉)などが現在整備されており, 加えて, 前述の九州自然歩道の再整備を民間団体がボランティアを募り実施していく動きも始まり(九州自然フォーラム〈福岡市〉), 環境学習や自然に触れ合うことに重きをおいたトレイルも整備が始まっている。

このように全国でトレイル整備が進む状況下, 全国のトレイル運営機関・諸団体による多角的な広報活動と普及促進, さらに情報交流などを行い, 海外からも多くの人々を惹き付ける持続可能なトレイルの普及とゆるやかな情報ネットワークの構築を目的⁵⁾に, 2010年には日本ロングトレイル協議会が組織され, 2015年にはNPO法人日本ロングトレイル協会としてその活動を継承することになったのである。

3. 道内におけるロングトレイルの動き

このようなロングトレイルムーブメントの中で, 北海道内では2008年度, 内閣府の「地方の元気回復事業」の採択を受け, とかちロングトレイル協議会が設立された。そして, 北海道開発局をオブザーバーに迎え, 「とかちロングトレイルによる農業・商業・工業の活性化」調査が実施された。その調査によるイベント開催を通じ, 鹿追町の然別湖から清水町の千年の森公園を結ぶ約100kmのルートが示される。こうして, とかちロングトレイル(とかちロングトレイル協議会〈帯広市〉)が産声を上げた。現在は, 帯広市を中心に新たな延伸計画も進んでおり, 更なる展開が期待される場所である。

2011年には, 中標津町から弟子屈町美留和駅の間に71kmの北根室ランチウェイが開通した。本稿ではこの北根室ランチウェイについて, 掘り下げて紹介することにする。

これまでいくつかのトレッキングルートを紹介してきたが, それらは概ね, 自治体や地域の観光関係機関などの発案のもと事業が推進され, これら関係者が主たる役割を果たし, または賛同者を巻き込み, 地域振興・自然との共生・保護の名のもとに事業実施されているものであった。ところが, 北根室ランチウェイは, 一人の発案者とそれに賛同する限られたメンバーによって手づくりで造られてきたトレッキングルートなのである。この北根室ランチウェイは, イギリスのスコットランド地方の牧場を貫くフットパスに共感した中標津の牧場主が, 中標津の開拓の歴史, 格子防風林のある風景, 何より広大な牧場が広がり, それでも起伏のある変化にとんだ風景や摩周湖周辺の雄大な景色や自然を歩いて感じてもらいたいと, 道をつなぐことに心血を注いで造り上げた道である。この北根室ランチウェイには, 実は, 町から町, 空港から空港を結ぶという壮大なロマンが描かれている。「言うは易し, 行ふは難し」で, 地域住民や牧場主との話し合い, 道や国が管理するエリアを通す際の交渉・協議や申請, 意見調整, 道標や牧場に入るための設備, 宿泊施設, 地図や

ガイドブック、Web サイトの開設運営、マスコミやハイカーからの問い合わせの対応や手配、更にこれらのメンテナンスと、トレイル運営にまつわる仕事は枚挙に暇がない。それを、本業の牧場の仕事の合間を縫いながら、ほんの数人で切り盛りしているのである。

また、その牧場主が、道標やパンフレット、施設のデザインも手がけているのだが、どれもセンスを感じる出来栄えなのである。他のトレイルを歩くと一目瞭然であるが、施設、設備に一貫したデザインの統一感が感じられ、安心感さえ与えられる。歩くための道のメンテナンスの精度、情報提供、景色の変化など総合的なクオリティの高さにおいて日本を代表するロングトレイルと言っても過言ではない。

しかし、ここで頭をもたげる問題がある。それは、発案者でありメンテナンスを進める旗振り役の牧場主の後継者がいない、ということである。それ故、地域を挙げた管理体制の確立が急がれる。2017 年 1 月、抜本的な後継者対策にはならないが、北根室ランチウェイの活動を応援する有志が集まり、次なる応援団の裾野を広げ、維持管理にかかる費用の負担金を集める目的でクラウドファンディングを立ち上げた。ファンドマネーを活用したロングトレイルの維持管理費用出資の呼びかけは日本で初めての試みであるが、今後の動向を注目したい。

道内ではこの他に、フットパスで地域をめぐる仕組みづくりや、ウォーキング、トレッキングルートの整備やイベントも各地で取り組まれ「歩く」観光、ライフスタイルとして「歩く」ことを意識したまちづくりなど、歩く文化は普及の兆しを見せている。道内に於いても、地域活性と地域をつなぐロングトレイル文化の形成と地域の活性化が違和感なく理解される時代を迎えていると言えるのではないだろうか。

4. ロングトレイル普及の課題と展望

これまで、日本国内におけるロングトレイル活用状況を述べてきたが、今後も、国内においては新たなロングトレイルの開設準備をしている地域も少なくない状況である。そこで、最後に、今後の課題として以下の二点を取り上げる。

まず、一点目は、「持続可能なトレイルであるか」という点である。ロングトレイルの距離に関する定義がないことは前述のとおりであるが、少なくとも数十キロから数百キロに及ぶトレイルの管理が継続的に行われるのかということは、避けては通れない問題である。この点を予め考慮に入れておかないと、環境庁（当時）が進めた長距離自然歩道の実態を見れば分かるように、その存在自体が地域に理解されておらず、メンテナンスどころか道の存在すら区画整理や道路の付替え等によってなくなっていたり、本来管理主体となっている都道府県の中で担当部署が曖昧になり、そもそも管理に対する事業計画や予算が付けられていなかったりと、造ってはみたものの管理も利用もされていないという状況になりかねないのである。実際、長い距離に亘って細かなメンテナンスをしていくことは物理的にも費用の面でも負担がかかる。里山や山林エリアに入れば高温多湿の日本の気候条件下

では雑草の繁茂も予想され、道自体が分からなくなってしまう。時期によっては、こまめなメンテナンスが必要となる。また、開設時の思いが次世代まで継がれていくのか、トレイル利用を左右するメンテナンスの精度にかかっていると言っても過言ではない。道標の設置やマップ、情報発信のツールのメンテナンスや更新も必須事項である。これらの作業や理念の継承について、持続性が問われるのである。

そして、二点目は、「安全の担保」である。管理責任が重んじられる日本の社会に於いて、トレイル上で起こりうるアクシデントにどのように対応していくのか、この対処法が見いだせないままトレイルの計画や準備が進んでいる実態も窺える。国を始めとした行政管理のエリアについては様々なリスクヘッジ策を講じ、時には利用（許可）をめぐる見解の相違により推進者側と行政のトラブルになっているケースがあるが、「自らの身は自らで守る」という精神が徹底されていない現状の中、その解決法を見出していくのは難しい。法の規制を縫って造られるのがまた、ロングトレイルなのである。更に、観光地においては、海外からの観光客が急増している。多分にもれず、各地のロングトレイルにも外国人ハイカーが増えている現状が報告されているが、その数に比して道迷いや遭難件数も増加傾向にあり、外国人の受け入れについての対策も急がなくてはならないだろう。

さいごに

地方創生の一つの柱に観光事業が据えられる状況において、また、健康趣向やアウトドアスポーツへの興味の高まり、「歩くこと」がライフスタイルとして定着する兆しを見せる今日において、新たな観光のスタイル「ロングトレイル」を活用し、地域の連携、地域資源の掘り起こしや保全、滞在時間の延長という効果が期待される。一方で、地方の人口減少は歯止めが効かず、観光地そのものの存在が危うくなりつつある地域も少なくない。しかし、新たな顧客獲得のための救世主とはならないまでも、安全で快適な、そして次世代に引き継がれる新たな道筋が生まれてくることを期待したい。

注

- 1) 日本ロングトレイル協会:設立について, <http://longtrail.jp/syui.html>(参照 2017-1-23)
- 2) 1) に同じ
- 3) スポーツ辞典 S-word:ロングトレイル <http://s-words.net/w/AB.html>(参照 2017-1-23)
- 4) 環境省:報道発表資料「北海道自然歩道の路線選定とそれにとまなう国立・国定公園の公園計画の変更に関する意見の募集について:参考資料 長距離自然歩道の概要」, <http://www.env.go.jp/press/files/jp/4497.html> (参照 2017-1-23)
- 5) 1) に同じ